

ヴェルサイユ宮殿美術館と現代美術——歴史的な展示空間と作品の摩擦がもたらした批評と破壊行為——

新井 晃 (一橋大学)

2000年以降、日本やフランスで現代美術の展示空間として城館や寺社仏閣など歴史的建造物を活用した事例が増加している。2019年の国際博物館会議においては、世界遺産である二条城と清水寺で現代美術の展覧会が催されており、従来のホワイト・キューブとは異なる歴史的建造物を展示会場とした。しかしながら、このような展覧会がなぜ試みられてきたのかについては未だ十分に議論されていない。本発表は、15年間の実績があるヴェルサイユ宮殿美術館を事例にその経緯と批評を確認して、展示空間と作品のあいだに起こる相互作用の一端を明らかにする。

1624年より建造が始まり、1837年に美術館として市井に開かれたヴェルサイユ宮殿は、1995年に自ら収益を捻出する文化施設公法人になると、2003年には赤字決算となった。そこでヴェルサイユ宮殿美術館は、入場者を増やすための新規軸として「ヴェルサイユ・オフ」(2004-2007)を開催した。この二日間限定の催し物において現代美術は、音楽や料理などと並んで扱われるにすぎなかった。その後2008年にはジャン=ジャック・アヤゴン総監により現代美術に特化した約三ヶ月間の展覧会「ヴェルサイユ宮殿の現代美術」となり、2019年までに世界各国から28名の作家が招聘された。

一連の展覧会は、とくに2008年のジェフ・クーンズと2010年の村上隆の展覧会を中心に多様な批評と反応を引き起こした。フランスの美術月刊誌は、豊富なコレクションを持ち、一定の訪問者も獲得しているヴェルサイユ宮殿美術館に現代美術を加える必要があるのか、疑問を示した。他方、フランスの小説家が指揮する有志団体は反対表明としてデモや署名活動をおこない、ルイ14世の子孫は展覧会の中止を求める嘆願書を国務院へ提出した。こうした批評と反応は、両作家が現代美術の経済性を重視しており、豪華絢爛なこの場所での展示が作品の市場価値向上へ繋がるゆえに生じていた。

続く2012年のジョアナ・ヴァスコンセロスの展覧会では、作品一点の展示を事前に許可しなかった措置に対して、検閲ではないかと議論が巻き起こった。そして2015年に招聘されたアニッシュ・カプーアはヴェルサイユ宮殿という場所を活かして作品を選び設置したものの、一部の作品がフランスの歴史を揶揄していると大論争が巻き起こり、二回の破壊行為へと発展した。本事件に対しては嘆く反応のほかに、近代美術史において物議を醸すことで新しい価値を創造してきた作品の系譜に連なるとも評された。

以上のように、ヴェルサイユ宮殿を用いた現代美術の展示は、作品がこの場所の歴史や文化を想起させるとき、人々の意識を歴史的建造物へと誘う役割を果たしていた。コ

コロナ禍のいま、実際の展示空間への来訪が困難となり、ヴァーチャル技術を駆使した展覧会が盛んに試みられている。観光とも関連の深い歴史的建造物での現代美術展覧会だが、作品と場所の双方へ注意を向けさせる役割において、コロナ終息後も重要な価値があるだろう。